

<論 説>

マズロー「1943年論文」に関する覚書

—「1948年論文」との比較において—

三 島 齊 紀

I はじめに

経営学の教科書やビジネス書の類に目を通すと、米国の心理学者 A. H. マズロー (Abraham Harold Maslow; 1908-1970) の名を頻繁に目にする。彼は欲求階層や「自己実現」の概念を提唱したことで広く知られている。彼の主張した理論は、斯学にとどまらず、教育学や看護・福祉など医療分野の書籍や論文においても数多く引用されている。

ところで、彼がそれらの概念を初出したのは 1943 年のことである。そうしたこともあってか、彼の 1943 年論文「のみ」を参照している書き物を目にするところがある。しかしそうしたものを読んでみると、小生は強い不安を覚える。というのも、マズロー自身が吐露しているように、1943 年当時の彼の種々の概念は未完のものだったためである。こうした点を強調するために、本稿ではマズローが階層性や「自己実現」概念を初出した僅か 5 年後の論文と比較を行いたい。

II 未完概念としての「自己実現」(1943年の2論文)

マズローは 1908 年にニューヨークで生まれた。1934 年には、H. ハーロウ (Harry Harlow; 1905-1981) の指導のもと、サル欲求に関する論文を執筆し博士号を得ている (ウィスコンシン大学)。1935 年からはコロンビア大学にて有期雇用され、主に女性の心的安定度や欲求に関する研究に没頭した。同じ頃、同僚である文化人類学者 R. F. ベネディクト (Ruth Fulton Benedict; 1887-1948) の勧めにより、カナダの北方ブラックフット・インディアンの調査も行っている。そこでの当初の目的は、彼が開発した心的安定度テストがアメリカ人以外の被験者にもどの程度妥当なものかを調べることにあった。しかしその居留地で、彼はアメリカ人とブラックフット族は、其々求めているものが大きく異なるように見えるもののその相違は表層的なものにすぎず、根幹では同じものを欲しているという両者の類似性に気付くようになる。そして、人にある程度共通してみられる特徴に関する研究へとその関心をシフトさせていった。

彼は上記のようなブラックフット・インディアンやアメリカに住む女性たちの調査から気付いた人間に共通してみられる生得的な欲求について、1943 年、“Preface to Motivation Theory” お

よび“A Theory of Human Motivation”の中で記した¹。

それらにおいてマズローは、通常、人には共通して「5次元の目的 (five sets of goals)」²からなる「基本的欲求 (The Basic Needs)」³が生得的に備わっており、それは、生体の欲する最も喫緊度の高い「生理的欲求 (the ‘physiological’ needs)」(生命を維持する願望等を満たそうとすること)に始まり、その欲求が一定程度充足されると、次に「安全欲求 (the safety needs)」(身の安全や秩序を欲すること)なる願望が表出してくるとした。同様に、第三欲求である「愛の欲求 (the love needs)」⁴(愛の授受に関する欲求)が満たされてくると、そののち第四欲求として「承認の欲求 (the esteem needs)」(自尊心と他者からの尊敬)が、そして第五欲求である「自己実現の欲求 (the need for self-actualization)」が表出してくるという「優勢度 (prepotency)」⁵に基づいた「基本的欲求の階層性 (the hierarchy of basic needs)」⁶の概念を措定した⁷。

その際マズローは、これらの概念に関する種々の補足も行っている。とりわけ本稿では、それらのうち2点に注目してみたい。それは、(1)「自己実現」の定義に加え、(2)マズローによる但し書きの2点である。

(1) 「自己実現」概念の定義 (1943年時点)

彼は「自己実現」について、往時、次のように説明していた。幾つか引用してみたい。

自己実現とは「ますます自分らしくなりたいという願望、自分になりうるものになりたいとする願望 (the desire to become more and more what one is, become everything that one is capable of becoming)」,

「自己充足したいという願望、即ち、潜在化している自分自身を顕在化させたいとする性向 (the desire for self-fulfillment, namely, to the tendency for him to become actualized in what he is potentially)」,

生理的、安全、愛、承認という「諸欲求が充足されたとしても、自分自身に相応しいことを行っていないならば (unless the individual is doing what he is fitted for)、常ではないが、しばしば新たな不満や、満足できない状態 (a new discontent and restlessness) が直ちに芽生えてくるのを感じる」傾向、

「音楽家は音楽を作り、画家は絵を描き、詩人は詩を作らなくては、彼らは本当に幸福であるとはいえない (A musician must make music, an artist must paint, a poet must write, if he is to be ultimately happy.)。人は本来的に成り得るものに成らなくてはならない (What a man *can* be, he *must* be.)」とする傾向⁸、更には、

「自分自身の可能性を最大限にしようとする性向 (the tendency to be the most that one is capable of being)」,

「自身の基となるパーソナリティを顕在化すること (working out of one’s own fundamen-

tal personality)」、

「潜在的パーソナリティの実現 (the fulfillment of its potentialities)」、

「パーソナリティ能力の活用 (the use of its capacities)」

「自己充足、自己の表現 (self-fulfillment, self-expression)」⁹、とも紹介している。

これらの文言からわかるように、マズローは1943年時点にて、「自己実現」概念を自己中心的な欲求…と誰しもが誤解しかねないような言葉を用いて定義していたと言えよう¹⁰。

(2) マズローによる但し書き

階層性や自己実現等について上記のような紹介をしたマズローであったが、同論文にて、次のような断りを彼方此方で入れていることにも留意されたい。まず、基本5欲求の分類について、彼は以下のような注意書きを入れている（下線は全て小生による）。

「この基本的欲求に関する分類は、文化間に見られる表面的相違の背後にある同一性を考慮してみようとする一試みに他ならない。つまり、私はこれがすべての文化に当てはまる最終的、もしくは普遍的なものであるなどとは主張していない。…（中略）…そうではなく、より人間に共通した特性に幾らかでも近づこうとする試みに過ぎないのである（Our classification of basic needs is in part an attempt to account for this unity behind the apparent diversity from culture to culture. No claim is made that it is ultimate or universal for all cultures. The claim…makes a somewhat closer approach to common-human characteristics.）」と¹¹。

加えて「自己実現」欲求の概念についても、彼はこのように注意書きをしている。「この自己実現欲求のはっきりとした現出は、生理、安全、愛、承認というこれよりも優勢な欲求の充足を基礎とする。そのような欲求の充足した人々を、我々は基本的欲求の充足者…（中略）…と呼ぶことができよう。ただし、我々の社会において、このような人は例外的な存在であるために、私たちは、この自己実現については、実験的ないし臨床的な次元でも十分にはわかっていないというのが本当のところである。これは、研究のための挑戦的な課題として残されたままである（The clear emergence of these needs rests upon prior satisfaction of the physiological, safety, love and esteem needs. We shall call people who are satisfied in these needs, basically satisfied people, …. Since, in our society, basically satisfied people are the exception, we do not know much about self-actualization, either experimentally or clinically. It remains a challenging problem for research.）」¹²。

彼は次のようにも述べる。そもそも人間の動機という「この領域に関する真つ当なデータが明らかに不足している。…（中略）…それが故、ここで提示される理論は、既に研究し尽くされてきたがために証拠が十分なもの、利用しうる事実に十分立脚したものという訳では

なく、今後の研究のための計画や枠組みを示唆するものであり、また、それらに依拠していくものとして考えられなければならない (Mostly this is because of the very serious lack of sound in this area. …The present theory then must be considered to be a suggested program or framework for future research and must stand or fall, not so much on facts available or evidence presented, as upon researches yet to be done)」と¹³。

つまり、自分が取り組んでいる動機に関する研究は、そもそも1943年時点で、未完のものであるとマズローが明記していたことに留意されたい。

さて、ここまで1943年時点の彼の主張を概観してきたが、それらを要約すると次のようになる。

(ア) 人には共通して生得的な5つの基本欲求が見られ、それらは生理→安全→愛→承認→そして最高次欲求の「自己実現」という生存の「優勢度に基づく階層性 (hierarchies of prepotency)」が見られること¹⁴、したがって、次段階の欲求が出現するためには、その前提条件として、通常、それよりも優勢な欲求がある程度充足されていなくてはならないこと。

(イ) 「自己実現」の欲求は、自己の潜在性を大いに発揮するという自己中心的色彩の強い欲求として受け取られかねないかたちで定義されたこと。

(ウ) しかし、彼が提唱したこれらの概念は、その本格的な調査がこれからであるとして、“今後の研究課題”として提示されたこと、である。

ところで、こうした概念を提唱してから5年後、彼は人の欲求に関する更なる研究成果を1948年論文「'高次欲求' と '低次欲求' ('Higher' and 'Lower' Needs)」にて公表している¹⁵。次に同論文を見ていくことで、彼の主張が如何様に変遷したのかを見ていくことにしたい。

Ⅲ 非自己中心的な「自己実現」概念 (1948年論文)

この論文の冒頭箇所にてマズローは、生体が有機体にとって「本質的なものと副次的なもの、強いものと弱いもの、「より高次なもの」と「より低次なもの」との間で選択を行っている」¹⁶とし、この点については、欲求階層について前述したA Theory¹⁷とPrefaceの論文を参照するように求める。続けて、こうした選好は科学的観察を行うことによって示唆しうるものであるとし、「本稿は、「高次」と呼ばれる欲求群と「低次」と呼ばれるそれとの間にある心理学的、また機能的な「実際」の違いを明示しようとするものである」¹⁸と、論文の目的・意図を述べている。

この論文で彼は、「低次」から「高次」という領域の順番について¹⁹の説明を14項目に分けて行っている。以下より、其々を概観していきたい。

〈1〉「より高次の欲求は、系統発生的に、ないしは進化論的に後になって展開してきたものである (*The higher need is a later phyletic or evolutionary development.*)」。人は食に対する欲求を生きとし生けるものたちと共有している。しかし愛の欲求は、(おそらく) 高等な類人猿と共有しているにすぎず、(少なくとも創造力ということについて言えば) 自己実現欲求は人間固有のものである。欲求はより高次のものとなるほど、人間により特有なものとなる (*The higher the need the more specifically human it is.*)。

〈2〉「より高次の欲求は個体発生的に、後になって発展していくものである (*Higher needs are later ontogenetic development.*)」。生まれたばかりの赤子でも生理的な欲求に加え、多少の安全欲求を見せる。生まれてから数か月して、赤子は好き嫌いのサインも見せはじめる。その後、尊敬や称賛を得るために何かを達成しようという衝動が観察されてくる。自己実現についていえば、モーツァルトでさえ、3歳か4歳になるまで待つ必要があった。

〈3〉「欲求は高次のものほど、生存そのものために必須なものという訳ではない。その充足を長期にわたって延期したり、ないしは、そうした欲求そのものが恒久的に消え失せてしまうことも容易にありうることである (*The higher the need the less imperative it is for sheer survival, the longer gratification can be postponed, and the easier it is for the need to disappear permanently.*)」。偏執的なまでに渴望するということは、尊敬よりも、安全の方でよく観察されるものである。このことは、高次欲求の剥奪があったとしても、低次欲求が剥奪される際に生じるような必死の防衛や緊急的な反応のようなほどのものは見られないことからそう言えよう。

〈4〉「より高次の欲求段階で生きていくということは、生物学的に見れば、いっそう能率的で、長生きで、病気になることが少なく、安眠や十分な食欲等が見られることを意味する (*Living at the higher need level means greater biological efficiency, greater longevity, less disease, better sleep, appetite, etc.*)」。心身症に関する研究者たちは、不安や恐れ、愛情不足、抑圧等が、心的なものだけでなく肉体的にも望ましくない結果を及ぼす傾向がある事を何度となく証明してきている。

〈5〉「より高次の欲求は、主観的にあまり喫緊なものではない (*Higher needs are less urgent subjectively.*)」。

〈6〉「より高次の欲求の充足は、いっそう望ましい主観的な成果、即ち、更なる深い幸福、平穏さ、内面生活の豊かさなどを生み出すことになる (*Higher need gratifications produce more desirable subjective results, i.e., more profound happiness, serenity, and richness of the inner life.*)」。安全欲求の満足は、せいぜいのところ、ホッとした感覚や息抜きをもたらす程度のものに過ぎず、満たされた愛がもたらすような恍惚感や幸せ、喜びを生み出すことはできやしない。

〈7〉「より高次の欲求の追及と満足は、通常、健康へと向かうこと、また精神病理から遠ざかることとなる (*Pursuit and gratification of higher needs represents a general health-ward trend, a trend away from psychopathology.*)」。

〈8〉「欲求はより高次のものになるほど、多くの前提条件が必要となる (*The higher need has*

more preconditions.)]。「尊敬や地位を探し求めることは愛を探し求めること以上に、より多くの人々、より広範囲な分野、より長期に渡って様々な手法を含むものであり、また、種々の部分的目標を立て、より多くの副次的、予備的な段階を踏むものとなろう。安全を探し求める時と愛を探し求める時とを比較しても、これと同じことが言えよう」。

〈9〉「より高次の欲求は、それを生じさせるのに可能せしめるより良い外的条件が必要である (*Higher needs require better outside conditions to make them possible.*)」。より良い環境的条件、つまり家族、経済、政治、教育等というものは、単に人々が殺し合いをしないということのためだけではなく、互いに愛を示しあうことを可能とするのに必要なものである (ただし、この点についていえば、わかりやすい (筆者注; 例えば数字に置き換えうるような)、実際に示しやすい何らかの事が提示されると、熟慮されることなしに、この“より良い”という語が容易に冠され (与えられ、評され) てしまうような、そうしたきらいが一般的には見られること、このことには注意されたい)。

〈10〉「低次、高次欲求の両方をこれまでずっと満たしてきた人々は、通常、低次の欲求よりも、より高次のそれに大きな価値を置くものである (*A greater value is usually placed upon the higher need than upon the lower by those who have been chronically gratified in both.*)」。そうした人は、例えば「自己実現という目的のために、金銭や名声を放棄 (*to give up money and prestige for the sake of self-actualization.*)」する。

〈11〉「欲求は高次のものになるにつれ、愛の同一視の輪が広範囲なものとなろう。つまり、いっそう数多くの人々と愛の同一視を行えるようになり、また、それをより当たり前のものとしてみなすようになっていく (*The higher the need, the wider is the circle of love-identification, i.e., the greater is the number of people love-identified with, and the greater is the average degree of love-identification.*)」。私は、対人関係や社会学的現象に関する理論において最重要なものとして愛の同一視の原則について研究をし続けてきている。「原理的に言えば、愛の同一視とは、2人ないしそれ以上の人々からなる優勢さに基づく欲求の階層が、統合して1つになってしまうことと定義できよう (*We may define love-identification as in principle, a merging into a single hierarchy of prepotency of the needs of two or more people.*)」。例えば、お互い十分に愛し合っている2人の人間は、互いの欲求を区別することなく、彼ら自身のものとして応対する。この時、「確かに相手の欲求が、彼自身の欲求となっている (*Indeed the other's need is his own need.*)」(利己的になるということに関して如何なる欲求が関わっているのか等について、および上記のような原則についての詳述は、現在取り掛かっている著作の中で明らかにしていきたい)。

〈12〉「より高次の欲求の追及とその充足は、望ましい市民を作ることになり、これはまた、社会的にとっても望ましい結果に繋がることとなる (*The pursuit and the gratification of the higher needs have desirable civic and social consequences.*)」。「ある程度、欲求が高次のものになるほど、自己中心性が弱いものとなっていくことは間違いない (*To some extent, the higher the need the*

less selfish it must be.)」。飢えは非常に自己中心的なものである。しかし愛や尊敬を探求することは、必然的に他の人々を巻き込むこととなる。加えて、(単に食料や安全といったものよりもむしろ)愛や尊敬を探し求め、そうした基本的なものを十分満たそうとする人々は、「忠誠心、友好さ、市民意識のような性質 (loyalty, friendliness, and civic consciousness) を育み」、また、よりよい両親、夫、教師、公務員等とさせていく(マズローは、これに関する参考文献として、論文 *Some Consequences of Basic Need Gratification* (1948年)も参照するよう勧めている)。

〈13〉「より高次の欲求を充足することは、低次欲求を充足する場合よりも、より自己実現へと近づくことになる(2) (*Satisfaction of higher needs is closer to self-actualization (2) than is lower need satisfaction.*)」²⁰。これは、高次の段階で生きている人間には、自己実現しつつある人間に見られる性質が、かなりの程度見られることを意味している。

〈14〉「より高次の欲求の追及と充足は、いっそう強く、また真なる個人主義へと至ることとなる (*The pursuit and gratification of the higher needs lead to greater, stronger, and truer individualism.*)」。これは論理的には意味不明かもしれないが、それにも拘らず経験的には事実である。「実際、自己実現の段階で生きている人は、最も人類を愛していると同時に最も特異性を展開させているということが同時に観察されるのである」。

最後にマズローは、ここで挙げられた14項目もまた、1943年論文 *A Theory* で示された「欲求階層の順序を支持し、裏付けるもの」となろうという言を復誦し、これらの箇条書きを結んでいる。

上記14項目から、1948年時点におけるマズローの主張は次のように要約できよう²¹。

(あ) 1943年時点と同様、欲求の逐次性が主張されていること。即ち、人は生理→安全→愛→承認→「自己実現」という生存の優勢度という「相対的優勢さの原則に従って、はっきりと定まった階層性 (a fairly definite hierarchy on the basis of the principle of relative potency.)」があると再び述べている²²。従って、より高次の欲求が現出するには、幾つもの前提条件があったこと。=項目〈1・2・3・4・5・6・7・8・9・10〉²³。

(い) 1943年時点とは異なり、「自己実現」の定義に“非利己性”が含意・加味されたこと。欲求の全てが充足された自己実現人を観察すると、彼らは自己の特異性を十分に発揮しようという傾向と共に、他者を思いやる利他性が同時に表出されることが強調されている。一例として、自己実現人は「最も人類愛に富んでいるのと同時に最も個人的特性を発達させている (simultaneously to love mankind most and to be the most developed idiosyncratically)」²⁴とマズローは言明している。=項目〈14〉

(う) 上記(い)に付随することであるが、より高次の欲求であるほど「自己実現」に近づくため、非自己中心性が強まると示唆されたこと。つまり、1948年時点では、低次の欲求からより高次の欲求へと進んでいくことを、自己中心性の強い状態から徐々に抜け出し非自己中心性が

強まっていくものとマズローは考えていた。換言すれば、低次欲求（自己中心性）と高次欲求（非自己中心性が次第に強まること）を不連続な関係としてマズローは見えていなかったこと、である。=項目〈11・12・13〉

ここまで欲求階層および「自己実現」概念が提示された1943年2論文と、その僅か数年後に公刊された論文との比較を試みてきた。(A)双方とも欲求の階層性については同じように論じられていた。しかし、(B)「自己実現」欲求については、自己中心的なものとして受け取られかねなかった定義から、利己利他合一的、非自己中心的な欲求へとその内容に変遷が見られたと概説できよう。

IV むすびにかえて

実は後年、マズローは更なる修正を行っている。それは、1948年論文で示されていた(う)の低次欲求から自己実現欲求への連続性についてである²⁵。例えば、(α)彼は1955年論文“Deficiency Motivation and Growth Motivation”の中で、自己実現の欲求を他の4欲求とは性質の違う異質な欲求であるとし、明確な欲求2分類を行っている²⁶。

(β)更に彼は、第四欲求である承認の欲求までが満たされたからと言って、自動的に「自己実現」欲求へと進む訳ではないこと、つまり、下位4欲求と第五欲求の間には、所謂フォッサマグナがあることを主張するようにもなる。例えば、1967年論文“A Theory of Metamotivation: The Biological Rooting of the Value-Life”のpp.93-94.にて、彼は次のように述べている。「定義によれば、自己実現している人々（いっそう成熟し、より十全な人間）は、既に基本的な欲求を十分満たしており、いまや別の、更に高次の「メタ動機（“metamotivations”）」と呼ばれるものに動機づけられている。自己実現している人々は、定義によると、彼らの全ての基本的欲求（所属、愛情、尊敬、自尊心）を満たしている（中略）。明らかに私たちは、自己実現の段階未満にある人々の通常の動機—即ち、基本的欲求に動機づけられた人々—と、基本的欲求の全てを十分に満たし、それが故、もはやそうしたものが主たる動機とはなっておらず、むしろ「より高次の」ものによって動機づけられている人々の動機、この両者における相違を、直ちにはっきりとさせなくてはならない。そのため、そうした「より高次」な動機や自己実現者の有する欲求を「メタ欲求（“metaneeds”）」と名付け、「メタ動機」のカテゴリーと動機のカテゴリーとを区分するのが適切であろう（こうした基本的欲求の充足が、メタ動機のための前提条件ではあるものの十分条件ではないことは、今や、私にとって明白なことである（It is now more clear to me that gratification of the basic needs is not a sufficient condition for metamotivation, although it may be a necessary precondition.）（中略）。メタ動機は、いまや、基本的欲求の充足の後に、自動的に生じるものではないように私には思われる（Metamotivation now seems *not* to ensue automatically after basic-need-gratification.）」と（下線は小生による）。

こうした彼の言は、マズロー解説書の類でよく見かける1943年論文A Theoryに依拠して書かれたと思われる三角形を使った欲求階層の図が、後年のマズロー理論で見られる第四欲求と第五欲求の間に隔たりがあること、また、その2つが異質な欲求である点などを加味したものではないことを明白なものとする。この他にも後年、彼は至高経験や存在価値、更にはシナジー概念やZ理論などを展開していき、彼の主張は更なる変遷が見られるようになっていったことも補足しておきたい²⁷。

ともあれ、「自己実現」は利己的な概念ではなく、自他合一的、愛他的なものであることだけは1948年時点で確定しており、巷間にて流布している、単に“自己実現とは自己の能力の発揮である”との解釈とは大きく異なる概念であることを指摘できよう。従って、欲求階層、および「自己実現」概念初出時の1943年論文だけを使ってマズローを考察することは、危険であり、誤解を生みだしかねないことを指摘しておく²⁸。

※ 神奈川大学に赴任して以降、小生は小林康宏先生から数多くの助言を頂いてきた。ここに記し、謝意の一端を表したい。

注

- 1 Maslow, A. H., Preface to Motivation Theory., *Psychosomatic medicine.*, 5., 1943., pp.85-92. (以下、Prefaceと略記)、およびMaslow, A. H., A Theory of Human Motivation., *Psychological Review.*, 50., 1943., pp.370-396. (以下より、A Theoryと略記)。
- 2 Preface., p.91. およびA Theory., p.394.
- 3 A Theory., p.372.
- 4 ただし1954年著作*Motivation and Personality.*, p.89.において、彼は同欲求を「所属と愛の欲求(The Belongingness and Love Needs)」と改称している。
- 5 A Theory., p.370.
- 6 A Theory., p.386.
- 7 「少なくとも、人には5次元の目的が観察されるのであり、それらを基本的欲求と呼ぶことにする。それらは、生理的欲求、安全欲求、愛の欲求、承認の欲求、自己実現欲求と簡潔に述べられよう」。A Theory., p.394.
- 8 A Theory., p.382.
- 9 Preface., p.91.
- 10 「自己実現」概念が自己中心的な色彩のする定義となった一因として、同概念がクルト・ゴールドシュタインからの借りものであったことがあると思われる。当時のマズローのこうした主張は、彼自身が認めているように、ドイツ人脳神経学者K. ゴールドシュタインの研究に由来するものであった(A Theory., p.382.)。彼は第一次世界大戦での脳損傷患者に関する研究から、患者が外部環境に適応しようとする行動(生体が外界とうまく折り合いを付けていくこと: coming to terms of the organism with the environment)を「自己実現(self-actualization; Selbstverwirklichung)」と名付けた(Goldstein, K., *The Human Nature in the Light of Psychopathology*, Harvard University Press., 1940., pp.111-114., p.170. (以下、*The Human Nature.*と略記))。マズローは、彼の言うこの「自己実現」概念を脳損傷患者ではなく、正常人に対

しても適用できないかと考えた。ただし、1943年段階のマズローにあっては、必ずしもゴールドシュタインの主張について十分な理解を有していたかという点、やや疑問である。即ち、ゴールドシュタインのいう自己実現とは、自は他と共にあり、他と共に自があるという状況のなかにおけるものである。究極的な言い方をすれば、自分の「自己実現」は他者の「自己実現」でもあるということである。しかし、それは理想的状態であって、現実には常にそれに向かう葛藤のプロセスであるというのが、ゴールドシュタインの考え方である。個人の自己実現のためには、通例、他者の犠牲を必要とし、したがってそこには常にコンフリクトがはらんでいとされる (*The Human Nature.*, pp.203-204.)。そこで、ゴールドシュタインは、人が葛藤をなくし、他者と共に調和的に生きていくためには一定の積極的な努力が必要であるとする。そのために、「他者侵害・攻撃 (encroachment, aggression)」と「自己抑制・服従 (self-restriction, submission)」という2つの行動型の適当なバランスが求められるとする (*The Human Nature.*, pp. 204-206.)。神経症患者にあっては異常な攻撃を行ったり、あるいは異常な服従を示したりするが、健常者は他者との間に適当な折り合いを付けることができる。健常者に見られる適当な折り合いとは、個人が自己実現を達成し、かつ他者の自己実現をも促進するには、侵害行動と従順行動との間において一定の均衡関係 (a balanced relation between compliant and encroaching behavior) が構築されることである (*The Human Nature.*, p.207.)。こうした事態は、1943年段階のマズローにあっては、ゴールドシュタインの自己実現概念を、十分には理解していなかったことを裏付けるものと言いうことができる。そうして、マズローの理解したゴールドシュタインの概念が、ほぼそのまま1943年論文に載せられることとなったのである。

11 A Theory., pp.389-390.

12 A Theory., p.383.

13 A Theory., p.371.

14 A Theory., p.370.

15 Maslow, A. H., 'Higher' and 'Lower' Needs., *The Journal of Psychology.*, 25., 1948., pp.433-436. (以下より, Higher と略記)

16 Higher., p.433.

17 ただし原文には、「A dynamic theory of human motivation. *Psychol. Rev.*, 1943, 50, 370-396.」と表記ミスがある (傍点は小生によるミスの指摘部分) Higher., p.436.

18 Higher., p.433.

19 Higher., p.433.

20 ここで挙げられている (2) とは、参考文献の2つ目として挙げられている Goldstein, K. *The Organism*. New York: American Book を指していると思われる。Higher., p.436.

21 この調査の被験者が、正確には誰であったのかということについては、マズローによる調査日誌 Good Human Being Notebook (Lowry, R. J. 編著の *A. H. Maslow: An Intellectual Portrait.*, Brooks/Cole Publishing Company., Monterey California., 1973., pp.81-105.)、および1950年論文 Self-Actualizing People: A Study of Psychological Health., *Personality Symposia: Symposium #1 on Values.*, New York: Grune & Stratton, 1950., pp.1-34. からある程度読み取れることが出来る。

22 Higher., p.433. 彼は、次のようにも繰り返している。「この基本的欲求なるものは、相対的優位度の原則に基づき、かなりはっきりとした階層性をなしている。即ち、安全欲求は、愛の欲求よりも強いものである。というのも、両方の欲求が満たされない時には、有機体を支配しているのは安全欲求であることが、種々目に見える仕方でも表出されてくるからである。同様に、(下位階層に位置付けられている) 生理的欲求は安全欲求よりも強く、安全欲求は愛の欲求よりも強く、愛の欲求は承認の欲求よりも強い順となっており、承認の欲求は私たちが自己実現欲求と呼んでいる特異な欲求 (idiosyncratic needs we have called the need for self-actualization) よりも強いものなのである」(Higher., p.433.)、と。

23 ただし、マズローは1948年時点で、第何欲求から第何欲求までが高次 (もしくは低次) 欲求であるとの明確な区分は行っていないように思われる。つまり高次欲求、低次欲求という語は絶対的な意味合いと

してではなく、ある欲求から見てそれより下位にある欲求をより低次な欲求、その逆をより高次な欲求として、それらの用語を使っているに過ぎないと思われる。

例えば、項目〈10〉をみると、低次・高次欲求の両方を満たしてきた人は、高次の自己実現欲求の充足のためには名声も放棄するのであるとしていることから、この場合は、第五欲求が高次欲求の意味合いで、また、第四欲求が低次欲求の意味合いで用いられていることがわかる。他方、項目〈8〉をみると、尊敬や地位を求めることは愛を探し求める以上に多くの予備的段階を踏む必要があるとして、第四欲求を高次欲求、第三欲求を低次欲求と示唆している。しかしそれに続く箇所では、安全を探し求める時と愛を探し求める時も、比較してこれと同じことが言えよう…ともしており、即ち、この場合は第三欲求が高次を意味し、第二欲求は低次欲求としていることがわかる。もって、マズローは1948年時点で、第何欲求から第何欲求までが高次（低次）欲求であるとの明確な欲求2分類は行っていないと思われる。

24 Higher., p.436.

25 ただし「自己実現」欲求についていえば、既に1943年論文において、他の4欲求、例えば第四欲求は第三欲求が満たされない状態に置かれるようになると、第四欲求を重視するという姿勢から第三欲求の充足の段階へと退行するという点について述べているのにも拘らず、第五欲求は低次の4欲求が今現在充足されていないとしても、殉教してでもその段階に止まり続けようとするという場合が見られるということから、他の欲求と比較して特異な欲求であることが暗示されていた（A Theory., pp.386-388.）。

更に1948年論文の項目〈1〉の中でも、「自己実現」欲求が人間に固有なものであるが故（Higher., pp. 433-434.）、他の4つの欲求と比較して特異な欲求であるという点は示唆されていた。

26 生理・安全・所属と愛・承認欲求と自己実現との明確な欲求2分類については、次の頁を参照のこと。Maslow, A. H., “Deficiency Motivation and Growth Motivation”, *Nebraska Symposium on Motivation.*, 1955., p.3., 8., 17., 18.

27 Maslow, A. H. *The Farther Reaches of Human Nature.*, Viking Press Inc., 1971. を参照のこと。

28 最近、中野明氏により、『マズロー心理学入門—人間性心理学の源流を求めて』（アルテ、2016年）なるマズロー理論に関する「解説」書が出版された（同著5頁）。ただし一読すると、当該著作が幾つもの瑕疵を有した書物であることにすぐに気付く。内容面についての考察は別稿に譲るとして、ここでは形式的なものだけを指摘しておく。

[イ] 引用箇所のページが載せられていないため、裏がとりにくい書物であること。

同著では、“太字+マズロー訳本名”なる箇所が散見される。例えば、マズローをかじった者ならばよく知っている次のような文言が、中野氏の著作123頁に“太字+マズロー訳本名”のかたちで記されている。

「昔、芸術家である私の妻が、私の科学者としての強迫的な分類的思考についていらいらするといったことがある。たとえば、私は気にいった鳥や花や木の名前を、いつでも一種の反射的会話でたずねたものである。それはまるで、賞讃したり楽しむことでは満足せず、それについて何か知的なことをしないではいられないというふうであった。アブラハム・マズロー『可能性の心理学』、と。これは、中野氏が書名を明示しているがごとく、*The Psychology of Science* の訳本『可能性の心理学』において、全く同じ和訳文を見つけることができる（訳本127頁）。

同じような箇所は、他にもある。“ユーサイキア”について紹介している中野著作141頁にて、氏は、次のような転記を訳本からしている。「心理学的に健康で、成熟した、あるいは、自己実現する人びととその家族のみから構成されているのである。アブラハム・マズロー『人間性の最高価値』、と。この“太字+マズロー訳本名”の箇所も、彼が記した通り、マズローの原著 *The Farther Reaches of Human Nature* の訳本『人間性の最高価値』252頁に全く同じ和訳文が見られる。

更に、中野氏著作147-148頁の中では、マズローの“シナジー”概念を紹介している箇所がある。「これは利己主義と利他主義の二分法が解消されるということであり、利己主義と利他主義の対立や相互排他状態が見られる文化はまだまだ成熟しきっていないということである。アブラハム・マズロー『完全なる経営』、と。この“太字+マズロー訳本名”の部分も、彼が記した通り、『完全なる経営』の151頁にて全

く同じ訳文が見られる。

つまり、“太字+マズロー訳本名”の箇所は、訳本から和訳文が転記されていることから、こうした表記がなされている部分は、中野氏がマズロー訳本から転記したということを示す“印”としていることがわかる（少なくとも、間違いなく読者はそう読む）。事実、中野氏はこうした“印”箇所の前に、「マズローの言葉に耳を傾けてみましょう」、「マズローは次のように続けます」、「マズローは次のような言葉も残しています」、「マズローの言葉を引きみましょう」、「マズローはこう言います」…との言葉を付していることが多い（其々、中野著作 60, 117, 131, 147, 161 頁等を参照のこと）。しかし、上述のごとく当該訳本の何頁にそうした文言が記載されているかを中野氏は上記のような“印”箇所にて、一度も記載していない。そのため実際、和訳本のどこにその文章が書かれているのか、また、その前後文脈の文言についても知りたいと思っても、それが難しくさせられている面倒な書物であることを指摘しておく。

ところで、中野著作には、他にも幾つもの問題点がみられる。

[口] なにより、マズロー理論について「解説」する書物であるにも拘らず、その基本中の基本の階梯である原著にすら中野氏はあたっていないこと。

例えば、中野氏は著作の 77 頁にこう書いている。「マズローはこの 2 人についてメモを取り始め、やがてこれは「GHB」ノートに取りまとめられることになります。そして彼らの特徴を記録していくうちに、マズローは 2 人の型が共通していて一般化できることに気づきます。ちなみにマズローは大のメモ魔だったようです。(中略)それはともかく、ヴェルトハイマーとベネディクトを観察した「GHB」ノートは」…云々とある（また、別の箇所でも氏は、これと同様の旨を記述をしている）。

つまり中野氏は、“ヴェルトハイマーとベネディクトの 2 名を観察し、彼らの共通特徴をメモとして記録し取りまとめたものが GHB ノート”である…としているのだが、これは原著に当たっていないがための明らかな論過である。

確かにマズローは、自分が自己実現に関する研究を始めたきっかけについて、ヴェルトハイマー (M. Wertheimer) とベネディクト (R. Benedict) が人間として素晴らしく、それが故、彼らに対して関心を持ちメモを取り始めた…と記述している箇所がある（『人間性の最高価値』51-52 頁）。しかし、この 2 人についてメモしたものが GHB ノートではない。

実際に読者の皆さん自身が、GHB ノートを手にとって目を通して頂きたく思う。GHB ノートとは、マズローが 1945 年 5 月 6 日から 1949 年 12 月 20 日まで、Good Human Being (略して GHB とマズローは表記)、即ち、「自己実現」者と呼び得る人々を探求した際の調査日誌である（これは R. J. ローリー氏がマズローの妻パーサから許可を取って、1973 年に出版したものである。Lowry, R. J. 編著 A. H. Maslow: *An Intellectual Portrait.*, Brooks/Cole Publishing Company., Monterey California., 1973., pp.81-105. がそれであり、和訳本は公刊されていない）。

その初日 (1945 年 5 月 6 日) の記載の中で、マズローははっきりと、GHB に見え得る (1) 学生たちを教室内で探し (Pick them just by looking at them in class.), (2) 当時、マズローが開発していた安定度スコアテストを彼らに受けてもらい (Then look up their security scores.), (3) そうした学生たちを相手に 1 時間ほどの面接を行い (Then interview them for about an hour), 更にはロールシャッハ・テスト (Rorschach test) 等々も使って、学生たちの中から自己実現者なるものを明確に導出することができるかどうかを行う…としている。つまり、彼ははっきりと、GHB に見え得る「学生」を対象とした調査を行っていくこと、その際、目の細かい幾つものプロセスを経るという予定で行っていく…と明記している (The layout now is to collect students who look like potential GHB and then to through several sieving processes.)。 (原著 p.81.)。従って、当然、このノートのどこにも、これはヴェルトハイマーとベネディクトに関するメモを集めたものである…との文言を見つけることは出来ない。

事実、上述の作業をマズローは学生相手に繰り返し行い続けるのだが、高い安定度スコアではあるものの、神経症的な傾向を持っている人や単に現実に適応するのが上手なだけの人などが選り出されてしまうという難題に直面し続け、被験者となる自己実現者の抽出というプロセスのその最初の段階から挫折の連続であったことがノートの中には詳述されている。そして、こうした手法では自己実現者を導出すること

が難しいと感じ始めた苦悩も記録されている（1947年1月10日の記録には、180人ほどの学生のうち選別できたのは、たった3人であった…とも記録されている（原著 p.100.））。そうした折、彼の知人たち（ストロープ氏（Stroup）ら）によって薦められたこともあって、彼が学生相手の調査と並行して、とりわけ、偉人に関する伝記本に没頭していくようになったさまも克明に描かれている（1945年8月28日；原著 p.85. や1945年12月28日；原著 p.89.）。例えば、1946年1月18日にH. ソロー（Henry Thoreau）に関する伝記から（原著 p.92.）、また1946年2月14日、同様に伝記本を通じて、スピノザ（原著 pp.95-96.）が自己実現者として数えられていった場面などが詳らかにされている。

確かに、このGHBノートの中にヴェルトハイマーとベネディクトの名を見つけることはできる。ただし、この1500日以上に渡る学生相手の調査からくる失望の連続、また、偉人に関する伝記調査の記録が綿々と綴られている中で、ヴェルトハイマーやベネディクトの名が挙げられている箇所はほんの僅かである。1946年2月14日の中でウェナー（Werner）とヴェルトハイマーは同じようなことを話していた…とする回顧記述（原著 p.95.）と、ヴェルトハイマーの名前だけが1945年9月8日の記録に挙げられているのみである（原著 p.86.）。また、ベネディクトに関する記述は、同日の記録の中で、女史が以前、強いプライバシーの感覚について口にしたことがあったとする点に加え、1949年3月の記録の中で「ルース・ベネディクトが亡くなった（Ruth Benedict died.）」と記録されているだけである（原著 p.103.）。

余談ではあるが、マズローのロールシャッハ・テストの作業を手伝っていた知人R. マンロー氏（Ruth Munroe）とのやり取りや、マズローによって自己実現者と数えられたこともある上述のH. ソローに関する記述の方がはるかに多く見つけられる。

ところで中野氏は、他にも次のような原著を確認しないが故のミスをしている。中野著作89頁の中で氏は、B 価値、即ち存在価値の概念について「マズローはこの語を1962年出版の『完全なる人間』で初めて用いています。」としている。しかしながら、この氏の記述も虚偽に他ならない。というのも、マズローはこの用語を既に1959年論文 *Being Cognition in Peak-Experiences* の pp.51-52. の中で言及しているからである。マズローは同論文の中で、こう書いている。「現時点で私が理解できている限りであるが、B 価値（B-values）とは、(a) 全体性、統合、合一、相互作用、(b) 必然性、完成、完全、そして不可避性、(c) 生氣、十分機能的であること、自発性、そして進展、(d) 豊かであること、複雑、そして錯綜、(e) 美、畏敬、(f) 善、義、望ましさ、(g) 独特さ、特異性、そして表現性、(h) 過度な無理のないこと、達成が容易なこと、緊張・奮闘がみられないこと、最後に (i) いつでもという訳ではないが、時にユーモアや遊び心の要素がみられることを指す」と（和訳は小生による）。つまり、上記の「B 価値は1962年に初出された」との中野氏の説明文は、原著論文に丁寧に当たっていないが故の明らかな誤謬である。

加えて、B 価値がマズローによって1959年にはすでに論じられていたことに関する記述は、最近の論文だけでも、例えば村田晋也、「McGregor リーダーシップ論の形成に関する一考察」、『経済論究』、第136号、九州大学大学院経済学会、2010年、232頁、おなじく村田晋也、「マグレガーの自己実現概念に関する一考察—マズロー概念との比較—」、『経営経済論集』、第18巻第3号、九州国際大学経済学会、2012年、119頁、更には河野昭三、「経営学総論」、『経営学研究のしおり【増補12版】』、甲南大学経営学会、2011年、18-22頁の中でも取り上げられていることを指摘しておく。

こうした原著そのものに当たらないことについて言えば、中野氏自身、著作の3頁で「マズローの邦訳された原典にあたったことのある人は少数派に違いありません。」とし、この中野著作の底本が和訳本であったことを自身が明記している（下線は小生による）。『マズロー心理学入門』だけではなく、中野氏の著した他の書物にも原著には一切当たらず訳本だけを用いるという傾向が見られるが、そもそも原著すら読まずして、どのように原著者の旨を詳述する「解説」書・「入門」書の類など作ることができようか…と、小生は強い疑念を抱かざるを得ない。事実、マズローの記した1941年著作 *Principles of Abnormal Psychology: The Dynamics of Psychic Illness* (With Béla Mittelmann.), New York: Harper & Bros. に加え、彼の日記 *The Journals of A. H. Maslow*, Vol. I・II (Ed: Richard. J. Lowry), Monterey, CA: Brooks/Cole. (マズローの死後である1979年に出版) も和訳本とはなっていないが、この2冊からの引用を中野氏は一

度も行ってない。つまり、マズロー理論の「解説」書であるにも拘らず、当該2冊の“内容説明”も何一つ行ってないという不可思議な事態を如何様に考えればよいのだろうか（中野著作 33-37 頁を参照されたい）。

こうした原著を熟読しないという手落ちの結果、上記のように読者に明らかに誤った情報を与えていることは決して看過しうる点ではない（この点は、これ以降の指摘とも絡んでくる）。

[ハ] 中野氏の著作では、訳本の誤訳もそのまま載せていること。

一例として中野著作 147 頁には、次のようにある。「低い社会シナジーのある所では、一個人の利益は、他人を打ちのめしたうえ獲得した利益であり、打ち負かされた大半は、我慢をして、しのいでいかねばならない憂き目に遭う。ルースベネディクトのシナジーの定義 アブラハム・マズロー『人間性の最高価値』より」とある。これと全く同じ訳文が、確かに上記の和訳本 237 頁にある。しかし、これは行き過ぎた訳文である（訳者である上田吉一氏の思いが入りすぎていて、正確な訳文とは言えない）。なぜなら、原文は次だからである（p.194.）。“societies with low social synergy where the advantage of one individual becomes a victory over another, and the majority who are not victorious must shift as they can [my italics].”（下線は小生による）。つまり上田吉一氏の前半部分の和訳は正確であるが、後半部（下線箇所）は、「打ち負かされた大半は、彼らがやれることを何とかやっていくしかないのだ [イタリック字は、私、マズロー自身による]」…である（ここで挙げられている *shift* は、「何とかやっていく、何とか生きていく」の意）。つまり（訳者である上田氏の思いは理解できるが）、少なくとも原文には“しのいでいかねばならない憂き目”，はたまた“我慢をして”等という文言は見られない。しかしながら、中野氏はこうした上田氏の行き過ぎた和訳も、原著を確認していないため、そのまま転記している（つまり、中野氏は誤訳もそのまま転記している。こうした和訳本を鵜呑みにすることの危険性については、三島斉紀、「A. H. マズローの *Motivation and Personality* に関する一考察」、『商経論叢』、神奈川大学経済学会、第 50 巻第 1 号、2014、9-10 頁の注 21、また、三島斉紀、「今日の所謂「自己実現」社会に関する一考察—マズロー「自己実現」社会概念との比較において—」、『商経論叢』、神奈川大学経済学会、第 51 巻第 4 号、2016、81 頁の注 6 を参照のこと）。氏は、“マズローの”「解説」本を書いているのだから、訳者ではなく、マズロー自身の言を正確に伝えなければならないことは言うまでもない。そうした重い責任があることを氏が軽視しているように小生は感じざるを得ない。

[ニ] 中野氏が、問題のある著作を好んで用いていること。

上記 [イ] で示したように、中野氏は、訳本『完全なる経営』から好んで引用を行っている（例えば、中野著作 131、141、147-148 頁等を参照されたい）。この訳本の原著は、*Maslow on Management* である。これは、Maslow 自身が執筆した *Eupsychian Management*（1965 年）の著作に、彼の知人たちが様々なコメント等を加えて 1998 年（つまり、マズローの死後）に再版されたものである。

ところが、この再版された *Maslow on Management* は、幾つもの問題点が見られる著作であることが知られている。例えば、編集者らは *Eupsychian Management* の中で、マズローが意図的に用いていた専門用語を勝手に書き換えたり、幾つもの章を恣意的に削除したり、更には彼方此方の段落を省いたりもしている、注意が必要な著作なのである。しかし中野著作の中では、そうした注意書きも一つも見られない。

一例として、中野氏の著作 161 頁には、こう書かれている。「以上をとりまとめてマズローはこう言います」とし、続けて「つまり、もともと労働者が充分高いレベルにあれば、進歩的な経営管理は基本的欲求の充足とメタ欲求の充足という二通りの方法によって、労働者の健康を増進することができるのである。アブラハム・マズロー『完全なる経営』（下線は小生による）、と。中野氏の指摘通り、訳本『完全なる経営』の中で、これと同じ文言を見つることができる（135 頁）。D. C. ステファンズ氏らによって編集され再版された *Maslow on Management*、即ち、中野氏が使っている訳本の原本は、この下線部分が“enlightened management”（同著 p.95.）とされている。しかし、マズロー自身が著した書物において、この下線部は、“eupsychian management”（原著 p.75.）となっている。即ちマズローは、ここで「進歩的な経営管理（enlightened management）」という語を用いることによってイメージされかねない、ないし誤解されかねない、単なる前衛的・啓蒙的な経営手法という意味合いに取られることを避けるため、あえて

区別して“eupsychian management”（ユーサイキアン・マネジメント）という語を用いている箇所なのである。

これは、編著者であるステファンズ氏による凡ミスではない。繰り返しとなるが、原著である *Eupsychian Management* と、ステファンズ氏によって編集された *Maslow on Management* の2冊の目次を比しても容易にわかるように、ステファンズ氏は、マズローが意味をもたせて、あえて造語 Eupsychian を用いて説明している箇所を、彼方此方で恣意的に Enlightened なる曖昧な用語に置き換えている。そのため、この2つの用語のどちらをマズローが用いていたかに関し大きな混乱を生みかねない、注意が必要な書物なのである。そうであるにも拘わらず、何故、そうした *Maslow on Management* ないしその和訳本を、あえて中野氏が好んで用いているのかが小生には理解しがたい。また、その理由を中野氏は彼の著作の中で説明してもしない。マズローの真意を正確に読者に伝えることを企図した「入門」書を出版するのであれば、当然、中野氏は問題のある *Maslow on Management*（ないし、その訳本『完全なる経営』）ではなく、原本である *Eupsychian Management*こそを用いなくてはならないはずである。

[ホ] 中野氏は、マズロー“訳本も精査していない”こと。

一例として、中野氏は89-90頁の中で「マズローがB価値として列挙する本質的価値は、のちに出版される『創造的人間』や『人間性の最高価値』で微妙に修正されています。後者の2書に掲載されているB価値は内容が同じなので、ここではこちらを掲げることにします。B価値は全部で14種類あります。次のとおりです。真、善、美…と書いてある（下線は小生による）。しかしながら、訳本『人間性の最高価値』の376-377頁において、マズローはB価値を15種類挙げている。つまり著作『創造的人間』（訳本122-125頁、原著pp.92-94.）と比べ、新たな項目が加わっている。即ち、B価値の内容が同じものではなく、変遷が見られるのである。その付け加えられた15項目目は、「意味あること（meaningfulness）」である。つまり、それまでの14項目にはない、新たな項目なのである（原著は *The Farther Reaches of Human Nature.*, pp.308-309. を参照のこと）。しかしながら氏は、この点も一度も指摘してはいない。

他方でこうした点は、マズローを扱っている研究者たちにとりとりわけ初歩的な知識であることも付け加えておく（例えば、金城朋子、「成長動機と至高経験—マズローの豊かなる遺産」、『現代のエスプリ別冊：現代における自己実現①理論と病理』、至文堂、1978年、86頁や、馬場房子、「モチベーション理論に関する一考察—B理論の提唱—」、『亜細亜大学経営論集』、第26巻第1・2合併号、亜細亜大学経営、1990年、289頁を参照のこと）。もって、こうした氏の主張もまた明らかな誤りであって、彼が和訳本すら精読していないこと、また、マズロー理論の変遷も十分に抑えずして、『マズロー心理学入門』書を著していることが明らかとなる。

[ハ] 仮に上記までの小生の指摘を踏まえても、それでも中野氏が原著を読んでいたと強弁するなら、そうだとすると、氏は、原著者であるマズローの文章すらも改竄していることになる。

中野著作88-89頁にて中野氏は、「マズローの次の言葉に注目してください」とし、マズロー著作『人間性の最高価値』からと“印づけ”して、こう抜粋している。「彼らが献身している仕事は、本質的価値の化身ないし権化として理解することができるように思われる。仕事は、これらの価値を具体的なものにするがために愛される。」と。しかし、この箇所における原文は以下である。“*The tasks to which they are dedicated seem to be interpretable as embodiments or incarnations of intrinsic values (rather than as a means to ends outside the work itself, and rather than as functionally autonomous). The tasks are loved (and introjected) BECAUSE they embody these values.*” (*The Farther Reaches of Human Nature.*, Viking Press Inc., 1971., pp.296-297., 下線は小生による)。この中野氏が引っこ抜いた括弧内を小生が補足しつつ和訳するならば、「彼らが献身している仕事は（仕事そのものという、外に存在する某目的を達成しようとするための手段としてよりも、また、機能的自律性としてというよりも、むしろ）、本能的価値の化身ないし権化として理解することができるように思われる。仕事は、これらの価値を具体的なものにするがために愛される（そして、取り込まれるのである。）」だろう。ここでの引用文は、致命的なものである。即ち、中野著作では、但し書き等をせずして、マズローの述べた言葉を正確に転記、ないし和訳せずに改竄している

ことが確認できるからである。

これと同様の点が、中野著作 91 頁でも見られる。「さらにマズローはこう述べます」との中野氏による言葉の後、「仕事は、究極的価値の運搬者、道具、もしくは化身になっているようである。彼らにとってはたとえば法律の仕事は、正義という目的のための手段であって、目的そのものではない。アブラハム・マズロー『人間性の最高価値』と“印づけ”られている。しかしながら、原文は次のようになっている。「仕事は、機能的に自律するものではなく、究極的価値の運搬者、道具、もしくは化身になっているようである。彼らにとってはたとえば法律の仕事は、正義という目的のための手段であって、目的そのものではない (the profession seems to be *not functionally autonomous*, but rather to be a carrier of, an instrument of, or an incarnation of ultimate values.)」, と (*The Farther Reaches of Human Nature.*, Viking Press Inc., 1971., p.297., 下線は小生による)。上記も、氏が読者に正確な情報を与えていないことの証左に他ならない。またこうした杜撰な編集は、原文の改竄と評されても抗弁できず、真摯にマズロー研究を行ってはいないことの証拠に他ならない。こうした粗略な引用手法は、伝言ゲームがごとく、徐々にオリジナルの真意から逸れていく起首となりかねないものである。

[ト] 周辺領域に関する調査も不徹底であること。

著者である中野明氏は同著にて文学部出身であると自己紹介している。所謂門外漢なこともあってか、同著の中で「経営学者はマズローの使いやすい箇所はつまむけれど、マズローが主張した理想論になると不味くて食べられないから無視してきたし、もちろん現在も目をつぶっています。これからもそうでしょう。」「B 価値への言及は皆無です」と経営学者たちに対して頓珍漢な発言を繰り返している (同著 175-176 頁)。

これほどの無責任で出鱈目な断言もあるまい。というのも、存在価値論 (B 価値論) について講じている「経営学者」は何人もおり、その点について彼らは主に論文等にて説明を行っている。このことから、理系学部で教鞭は取っていないながらも原著論文等を読まない中野氏が目にしていないだけの、単に下調べの不十分さを公言しているに過ぎない妄言である。一例として『神奈川新聞』2014 年 4 月 21 日 4 頁の記事「『自己実現』と『存在価値』の関係について」の中では、如何様にマズローの B 価値を企業経営に生かし得るかが載せられている。また、こうした点について詳述している経営学博士の“著作”も存在する。例えば、三島斉紀編著、『マズロー理論研究序説—「自己実現」概念とその経営学的意義—』、まほろば書房、2015 年を参照されたい。

補遺として、この B 価値論、すなわち存在価値論については、学部生をはじめとした誰しもが開くような非常にメジャーな経営学事典にすら明示されていることも記しておく。一例として、全国の大学付属の図書館に 250 冊近く所蔵されている、20 年近くにわたって親しまれている代表的な事典、経営学史学会編『経営学史事典』、文真堂、2002 年、38 頁にはこうある。「マズロー自身の自己実現欲求の概念は、見ている対象の存在価値を見て、その背後の世界との融合を認知し、その偉大さに感謝し、その念を自分の行動に反映したいという欲求である。彼は、人間主義的心理学を構築し、それが経営実践に適用されることを期待し自らも樽会社を経営した」と (余談として、この説明文を書いたのは、東北大学名誉教授で経営学博士 (東北大学) でもあられた故・河野大機氏であることを追記しておく)。

纏めたい。中野氏はアドラーやドラッカーに関する解説本も何冊か出しており、それらにも既述してきたような難点が無数に見られるが、中野氏は、そうした著作の 1 つの中で次のように自己紹介を行っている。「一介のもの書きである私は、経営学のアカデミックな立場からはほど遠い位置にいます。肩書きもありません。幸か不幸か賞罰もなしです。とはいえ、私自身のことをもう少し説明しておきますと」(中略)「過去に書いた作品で、中国、台湾、韓国で翻訳されたものは、累計で 20 冊近くあります。現在も 6 冊が翻訳中です。まあ、「それがどうしたの」と言われればそれまでなんですけれど。このように肩書きのない者としては、自分の業績を列挙して、帰納的に「信頼できる人物」だと、皆さんに印象づけざるを得ません。(中略) あとのご判断は皆さんにおまかせしましょう」と (中野明『「超ドラッカー級」の巨人たち: カリスマ経営思想家入門』、中公新書ラクレ、2011 年、4-5 頁)。つまり、自分は経営学に関する専門家ではないものの、斯学に関する著作をこれまで何冊も書いてきており、国外においても数々翻訳さ

れてきている…と氏の旨を言い換えられよう。

「解説」本であるにも拘らず、原著論文にも当たらず（ないし改竄し）、裏付けのために必要なマズローが残した日記にも一切当たらず、訳本だけに依拠し、その訳本にすら精通しておらず、引用頁すら載せず、いきすぎた誤訳もそのまま載せるなどの形式的な事柄についての基本的なルールさえも喪失しており、挙句、周辺領域に関しての調査不足が故の誤記を続ける、こうした表層的な知識をひけらかすだけの未熟な欠陥本と「判断」せざるを得ない「信頼」できないモノが、真摯に勉強したいと願う学生、サラリーマンたちの誤解の根源とならないことを小生は願わずにはいられない。